

平成29年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 大蔵 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成29年4月18日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語、算数)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査(国語、算数)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容 ・実生活において不可欠であり、常に活用できるようにになっていることが望ましい知識・技能	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力 ・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

(2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※本校の6年生は、単学級ですので、個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B、算数A・B)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	11.0	74	5.1	57	11.6	77	4.9	44
全国	11.2	75	5.2	58	11.8	79	5.1	46

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・無解答率が全体的に低く、問題に対して、粘り強く取り組むことができていた。 ・「書くこと」に関しての問題の正答率が低く、課題がある。
	よくできた問題	・学年別漢字配当表に示されている漢字を正しく読む。
	努力が必要な問題	・学年別漢字配当表に示されている漢字を正しく書く。
国語B	全体的な傾向や特徴など	・無解答率が全体的に低く、問題に関して粘り強く取り組むことができていた。 「話すこと・聞くこと」に関しての正答率が低く、目的や意図に応じた適切な言葉遣いで話すことができていない。
	よくできた問題	・登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を捉える。
	努力が必要な問題	・目的や意図に応じ、適切な言葉遣いで話す。
算数A	全体的な傾向や特徴など	・全体的に正答率が低い。中でも「数量関係」の正答率が低く、特に任意単位による測定についての理解が低い。 ・「図形」においては、円を使って正五角形を書くとき、円の中心(360°)を5つに分けた72°で区切ればよいことについて、1/3の児童が理解できていなかった。
	よくできた問題	・未知の数量を口で表し、除法の式に表すことができる。
	努力が必要な問題	・重さ、長さについて任意単位による測定を基に比較しているものを選ぶ。 ・二次元表の合計欄に入る数を書く。 ・円を使って正五角形を書くとき、円の中心の周りの角を何度ずつに分割すればよいかを書く。
算数B	全体的な傾向や特徴など	・無解答率が全体的に低く、問題に対して、粘り強く取り組むことができていた。 ・示された考えを基に、図で表し、考えたり説明したりする力が付いている。 ・示された式の中の数の意味を表と関連付けることができていない。
	よくできた問題	・示された考えを解釈し、数を変更した場合も同じ関係が成り立つことを、図に表現する。
	努力が必要な問題	・示された式の中の数が表す意味を書き、その数が表のどこに入るかを選ぶ。

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要

質問紙調査の結果分析
・自己肯定感を感じている児童は全国平均を上回っている。しかし、友達の前で自分の考えや意見を発表することに抵抗感をもっている児童も多いことから、これからも全教育活動において、自分の考えや意見を発表したり、交流したりする活動を充実させていく。 ・「総合的な学習の時間」では自分で課題を立てて情報を収集・整理し、発表することができると答えている児童は、全国平均と比較して高い。しかし、友達と話し合うとき、友達の考えを受け止めて、自分の考えをもつことができている児童は全国平均を下回る。また、学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に描いたりすることが難しいと思う児童も全国平均を下回っている。今後は、自分の考えを表現しようとする児童をより一層賞賛したり児童自らが表現力の伸びを実感したりできるような指導を行い、児童が自信をもって表現活動に取り組めるようにしていく。 ・テレビへの接触時間は増加傾向にあり、2時間以上利用している児童の割合が増えている。テレビゲーム等への接触時間も増加しており、家庭での生活習慣の改善を促していく取組が必要である。 ・1時間以上家庭学習をしている児童の割合は、全国平均と比べて高い。家庭学習で復習はよくしているが、自ら計画したり次の学習に興味をもって予習したりする児童は全国平均と比べやや低い。今後は各通信や学級懇談会等で学習時間の目安や家庭学習の仕方を具体的に示し、家庭と連携して指導していく必要がある。

・地域の行事に興味をもって参加し、ボランティア活動をすることで地域をよりよくしたいと考えている児童が全国平均と比べて高い。生活科や総合的な学習の時間での校外学習における地域学習の成果であると考えられる。今後も、生活科や総合的な学習の時間、道徳等の取組とも関連付けながら、年間を通して地域とのつながりをもった指導の充実を図っていく。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

○ 学力向上のための特設の時間(補充学習)の実施

・毎日、補充学習の時間(放課後15分間)を設定し、学力定着サポートシステムの問題を中心に反復練習を行い、基礎学力の定着を図る。
・朝の学習では、水曜日を算数タイム、火・木曜日を国語タイムとして設定し、学級の実態に応じた課題に取り組むようにする。また、月・金曜日に読書タイムを設定し「読む力」の育成を図るための取組を行う。

○ 言語活動の充実

・学習のまとめの(振り返り)時間を確保する。
・国語科の学習では意見を発表する時、うまく伝わるように話の組み立てを工夫することや、自分の考えの理由が分かるように気を付けて書くこと、また文章を読む時に、内容を理解しながら読むことができるように、読み取ったこと、感じたことを伝え合う場を位置付ける。
・算数科の学習では基礎・基本の知識を確実に習得させる学習を継続する。また自分の考えを図や式に表すことや説明を書き、相手に伝える活動を通して、算数の活用に関する力を高めていく。

○ 総合的な学習の時間・生活科の学習を通しての学力定着

・各教科等との関連を重視した学習展開を図る。総合的な学習の時間での学びを各教科等の理解の深まりにつなげて、さらなる学力の定着を図る。

○ 学力推進教員の取組

・学力向上推進教員が教職員に対して授業改善のアドバイスをを行い授業力の向上を図る。また、児童に対しても、個別の支援を行うなどきめ細やかな指導の徹底をしていくことで、学力向上を図っていく。

○ 体力向上に向けての取組

・1校1取組である大蔵アイソメトリックの時間を毎週月・金曜日の朝の学習の始めに設定することで、全学年児童の基礎体力の向上を意図した継続的な取組を行う。

② 家庭生活習慣等に関する取組

○ 全国学力・学習状況調査の課題と取組等を保護者へ周知

・学校だよりや学校ホームページで保護者に学校での学力向上の取組を伝えていき、学習習慣や生活習慣の改善に係わる啓発を継続して行う。

○ 家庭学習の習慣化を図る

・学年・学級懇談会で学年や学級の課題と現在の取組状況を説明し、保護者に対し理解と協力を得るようにする。また、個人懇談会では、個別の課題を明確にするとともに、学習習慣の定着に向け家庭の協力体制を構築しながら家庭学習を習慣化する。

・自主学習ノートを活用して、自分の課題に応じた学習が計画的にできるようにする。

・「家庭学習チャレンジハンドブック」を宿題等で活用するように指導し、保護者にも呼びかけ、担任がその取り組みを確認、賞賛しながら、児童の学習意欲を高めていく。

・夏休み・冬休み・春休みの課題として、児童の実態に応じた課題を提示し、家庭学習の定着を図る。

○ 小中が連携した学力向上・生活習慣の改善の取組

・中学校区小中合同研修会を開催し、児童生徒の学力向上・生活習慣の改善について協議し、共通理解を図る。

・小中連携教員が6年を中心に学習・生活指導を行い、学力向上や生活習慣の改善を図って、中学校への円滑な接続を促す。また、本年度実施した、大蔵中学校区「ふやそう笑顔サミット」を継続的に実施して、共通実践を行う。